

春です、新しいのちです。

三 木 メ イ

奨励者紹介〔みき・めい〕

同志社大学キリスト教文化センター助教

〔研究テーマ〕キリスト教の実践神学（女性学、人間関係、牧会）

さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。天使は婦人たちに言った。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。』確かに、あなたがたに伝えました。」婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。イエスは言われた。「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。」

（マタイによる福音書 28章1―10節）

新たな体験で新しい自分を造る

春になりました。満開だった桜は散ってしまって、葉桜になって、新緑がどんどん成長していくのが日々感じられる季節になりました。

大学では、新入生が入学して新たな環境で学びを始めています。今日ここに集まった皆さんの中にも、新入生がいるだろうと思います。講義期間が始まって1週間ですが、教室に迷わず行けるようになったでしょうか。入学式から始まって、履修登録や、サークル選びをし、通学の道を確認し、友達を作ったり、一人暮らしを始めた人はその生活を整えたり、とても忙しい毎日を送っていたのではないかと思います。新しい環境の中で、新しい体験をして、新しい関係を築いていくことは大変なことで、心と体のエネルギーを消耗してしまいます。しかし、人間が成長していくためには、そのような体験が必要不可欠であることは確かだと思います。今までとは違う新たな自分になっていく、という可能性を秘めているのです。新入生のほとんどは、3月までは高校生でしたが、大学生である自分を毎日新たに経験しながら、新しい自分を造っているのです。それは、楽しいこと、嬉しいことのはずですが、一方で新しい状況に慣れないうちは不安になって、どうしたらいいのかという悩みを生み出しますから、ストレスがいろいろ重なり、心が危機的な状態になる可能性も大きい時期だと思います。

そのような時には、皆さんはどうしていますか。まずは、友だちや知り合いを作って、話をしてみることで

ね。「さっきの説明、よく分からなかったけど、あなた分かった?」とか、「お昼はどこへいくの?」とか、些細な声かけから友だちができていくことも、この時期は特に多いのではないかと思います。そして、皆さんが忘れがちなのは、大学で学生をサポートする仕事をしている教職員の存在です。

大学は、皆さんが自分で判断して、自分で決めて、責任をもって自立して歩いていけるようになるための教育の場でもあります。ですが、最初からすべて自立して順調にスタートできるわけではないことを、私たち教職員はよく知っています。ですから、分からないことや、悩むことがあれば、誰に相談していいか分からない時も、とりあえず先生か職員の人に聞いてみてください。サポートしてもらえるはずですよ。

それから、新しい自分を造っていくためには、自分の目指す目標をしっかりとつ、まだなければ探すということも重要だと思います。

目標が定まっていれば、自分が取り組むべき課題がはっきりしてきます。すると、どういう勉強をどのくらい大学生のうちにしておかないといけないか、ということも自分で分かってくるでしょう。目標がまだ定まっていない人は、一生懸命手探りでいいから自分なりに探しましょう。何のために何を大学で学ぶのか、学びたいのか、という目標をもって歩むことが、新たなあなたを造っていきます。

2回生以上の皆さんは、自分の目標をもう見つけたでしょうか。

イースター＝新たな「いのち」の復活

「春です、新しいいのちです」という奨励題ですが、目に見える命の誕生というだけではなく、先ほどお話したような、新たな自分を造っていく、新たな自分へと成長していくという意味での「新しいいのち」という意味で表現しています。「いのち」という言葉は、実にさまざまな場面で多様な意味で用いられる言葉です。

聖書にも「いのち」や「命」という言葉がしばしば出てきます。その中には、目に見える生物学的な意味での「命」を指しているのではなく、象徴的にさまざまな意味を含んでいることが多いのです。そして、目に見えない「新しいいのち」は、新しい関係性と新しい目標とによって、生み出されてくるものを象徴している場合がある、ということ覚えておいてください。

この春の季節、キリスト教会の暦において、毎年「新しいいのち」が私たちに与えられたことをお祝いする、という日があります。それは、「イースター」(復活祭)と言います。近頃は、キリスト教とは全く関係なく、スーパーとか菓子メーカーがイースター関係の製品を販売するようになったようですね。ある新聞社の記者が、キリスト教文化センターに電話してきて、「キリスト教のイースターの意味について取材したい」ということで、私が電話インタビューを受けました。後日、新聞に掲載された記事を見たら、今年はいろんなメーカーが、こんなイースターグッズを作って販売を始めた、ということが紹介されていました。「HAPPY EASTER」「JOY of EASTER」とか書いてある商品がありますが、本当の意味を理解して作っているのかなあ、本来のイースターとは関係なくこの春の季節の期間限定商品にできるから利用しているのかしら、とか考えてしまいました。

こういう商品ではなく、昔から教会でイースターに作られていたのが「イースター・エッグ」です。鶏の卵を茹でて、それに食紅で色づけしたり、絵を書いたりして、教会の人々に配って、食べて、象徴的な意味での「新しいいのち」「復活のいのち」をお祝いする慣習があります。イエス・キリストが十字架に架けられ、

殺されて、3日後に復活されたという記事が聖書に記されています。その復活をお祝いする日をイースター（復活祭）と呼んでいるのです。

イエス・キリストの「復活」物語

先ほど読んだ聖書箇所は、キリストの復活を知らせる記事です。もう一度その記事の内容を見てみましょう。

イエスが十字架に架けられ殺されてから3日目の日曜日の明け方のことです。マグダラのマリアともう1人の女性が、イエスの遺体が納められたはずの墓に行きました。それは、丘に横穴があり入り口が大きな石で塞がれている形の墓でした。するとその時、大きな地震が起こって、天使が天から降って来て石を脇へ転がし、その上に座りました。それを見た番兵たちは、恐ろしさで震え上がりました。そして、天使は女性たちにこう告げます。「恐れることはない。十字架につけられたイエスはここにはおられない。死者の中から復活なさったのだ。遺体のあった場所を見なさい。それから急いで他の弟子たちのところに行って、イエスは復活してガリラヤに行かれる、と伝えなさい」。女性たちは恐れながらも、大いに喜んで、急いで墓を立ち去って弟子たちに知らせるために走りだしました。すると、行く手に復活したイエスご自身が現れて、「おはよう」と言われたので、女性たちはイエスの足を抱いて、ひれ伏しました。そして、イエスは「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる」と言われた、と書いてあります。

ここに書かれたことが、そのまま起こった事実として伝えられたので、これは人々を驚かせる復活物語になったのですが、では現在のクリスチャンが皆これを事実だと信じているのか、というとそういうわけではありません。死んだ人の肉体がよみがえった、というのではなく、それよりももっと重要な、象徴的な、信仰的な意味で捉えるのです。先ほどお話しした「新しいいのち」と同じです。つまり、イエスの弟子たちが、新しい関係性と新しい目標をもつことによって、急激に成長して、新たにされて歩みだしたことを、象徴的に描いているのだと、私は理解しています。

イエスの弟子たちが「新しいいのち」を歩みだす

イエスの直弟子たちは、イエスが逮捕される時には皆、イエスを置いて逃げ出していました。「私は決して裏切りません」と言っていたペトロでさえ、イエスが裁判にかけられている間に、「お前はイエスの仲間だろう」と疑われると、「そんな人は知らない」と言って逃げ出してしまったのです。イエスを本当に神の子、救い主と信じきれなかった、情けない、心の弱い弟子たちの姿が福音書に記されています。しかし、彼らはイエスの死後、「復活」の出来事があってからは、殺されることも恐れない強い信仰をもって、イエスこそ神の子・キリストであるとの福音を宣教していくようになったのです。歴史的事実としての「復活の出来事」が何であったのかはよく分かりませんが、とにかく確かなことは、弟子たちがイエスの死後に、イエスとの新しい関係性の中で、生まれ変わったようになって新しい人生を歩み始めた、ということです。

新しい関係性とは、いつもイエス・キリストが共にいて歩んでくださるのだ、という確信を弟子たちがもつようになった、ということです。イエスが生きておられる時には、弟子たちはイエスに従って仕えていただけでしたが、イエスの死後になって、イエスはいつも共にいて守り導いてくださるという確信をもつようになり

初めて、依存的にではなく、自ら主体的に、迫害をも恐れずキリストの福音を宣べ伝えていけるようになったのです。弟子たちが体験した「復活」の出来事は、目には見えないイエスが共にいて、導いてくださっていると気づき、それを心から信じることができた最初の出来事だったのではないかと思います。

それだけ大きな愛で弟子たちを包んでくれていたイエスだったのです。弟子たちの弱さや罪深さを充分に知りながら、それでもイエスは弟子たちを赦し、受け入れ、支え、守り、導いてくださった、それは神さまの愛と同じだ、と弟子たちは気づいたのです。それによって、生前イエスが語っていたこと、行っていた行動の真実の意味を悟ることができたのでしょう。だから、その後の弟子たちは力強い言葉で福音宣教活動を行い、ユダヤ教徒であった彼らが、後にキリスト教会と呼ばれる共同体を形成していくことになったのです。そして、不思議なことに、イエスに会ったことのない多くの人々も、弟子たちの話を聞いて、イエス・キリストが共にいてくださる神の子だとの信仰をいただくようになり、キリスト教が世界に広がっていったのです。

「いのち」と「いのち」の出会いから

人生の中で新たな経験をして、多くのことを知り、考え、大切なことに気づいていくことによって、私たちは新しい自分を造っているのです。けれども、それは自分の力だけで生み出されるものではなく、自分以外の多くの人々の力の影響を受けて生み出されるものだということを心に覚えておいてください。そして、出会う人との「いのち」と「いのち」の交わりの中から、本当に大切にすべきことは何か、自分が信じられる真理を探してみてください。そのために時々チャペル・アワーに参加してみてください。そういう新たな歩みを始めようとしている皆さんを、神さまが見守り導いてくださるようお祈りしています。

2016年4月13日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録